

東山総合支援学校 令和6年度 前期 学校評価アンケート考察

○方法

生徒、教職員については Forms による回答、

保護者は Forms もしくは質問用紙のいずれかによる回答

各項目を4段階で評価

「そう思う」「まあそう思う」もしくは「よくできている」「だいたいできている」を肯定的回答とし、「あまり思わない」「思わない」もしくは「あまりできていない」「できていない」を否定的回答として分析

○質問数及び回答数

教職員アンケート集計(27項目)(32/44名)

生徒のアンケート集計(24項目)

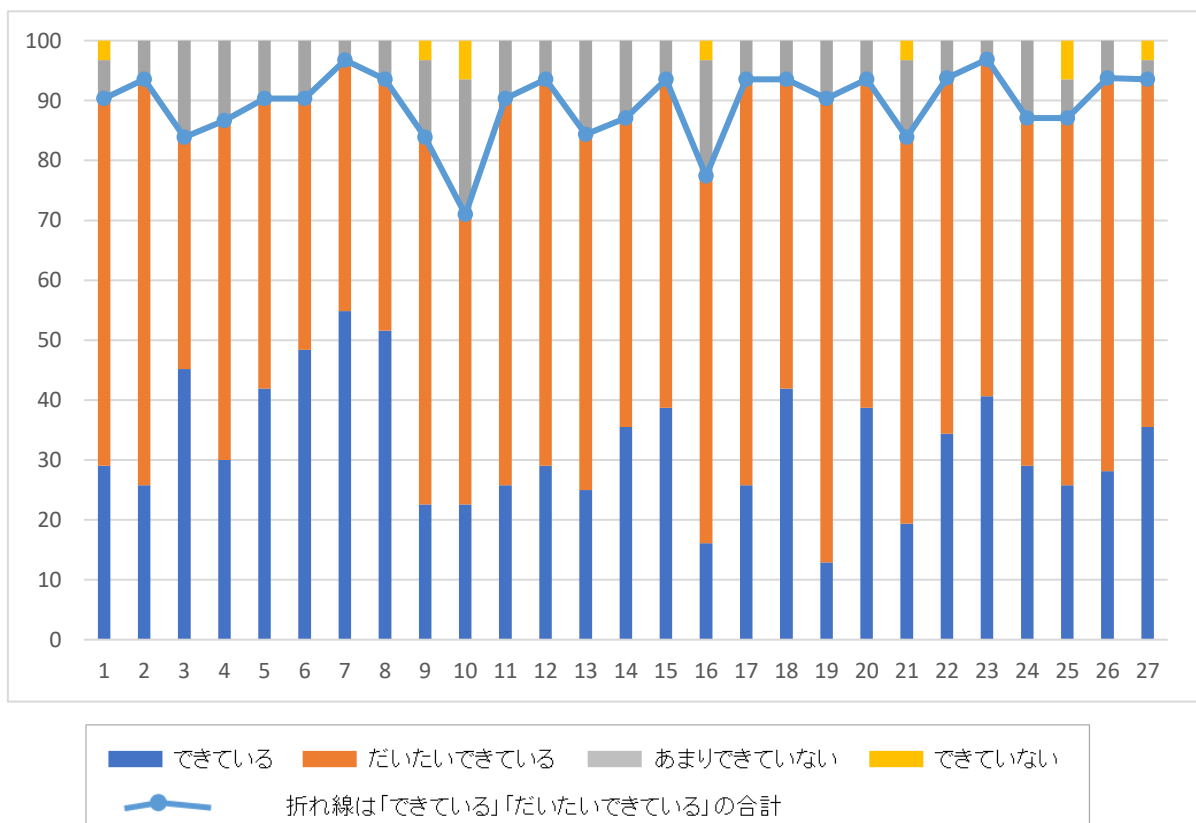
(全生徒:97/109名 1年生:33名/36名 2年生:29/37名 3年生:35/36名)

保護者のアンケート集計(25項目)

(全保護者88名/109名 1年生:28名/35名 2年生:28/34名 3年生:32/37名)

教職員

アンケート集計(27項目)(32/44名)



教職員アンケート27項目における「できている」「だいたいできている」を合計したものの平均は89.4%であった。

そのうち、「できている」「だいたいできている」の合計が95%を超えるものについては、

- ⑦生徒のよさを積極的に見つけ、認め、伝えている（97%）
 - ②地域との連携・協働による学習環境が設定できている（97%）
- の2項目であった。

この2項目に次いで高い数値を示した項目は以下の10項目である（数値はすべて94%）

- ②生徒や保護者に短期目標や評価について、伝えている
 - ⑧働く意欲や働くために必要な姿勢・態度を育てている
 - ⑫生徒が誰かの役に立ちたいという思いを促す学習を用意している
 - ⑮生徒には規則正しい生活を送るよう指導している
 - ⑰生徒に衛生に関する指導や支援を行っている
 - ⑱生徒に学校のきまりや約束を守る大切さについて指導している
 - ⑳生徒には時間を守る大切さを指導している
 - ㉒企業との連携・協働による学習環境が設定できている（職場実習など）
 - ㉔全教職員が学校いじめの防止等基本方針の内容を理解し、組織的対応に努めている
 - ㉖生徒・保護者の訴え（アンケート結果含む）や相談内容を共有している
- であった。

⑦について、教職員一人一人が、生徒をできる存在ととらえ、一人一人と向き合い、良いところを見つけようと日々関わっていることがうかがえる。

②について、社会福祉協議会をはじめ、様々な場面で地域の方にご協力をいただきながら、本校の学習活動が成り立っており、そのことを基本として学習を組み立てていることがうかがえる。数値94%を示したの項目の多くは、卒業後の就労や生活に向け、生徒にどのようなことを指導・支援していくべきか考えながら授業を組み立てたり日々生徒と向き合ったりしているかことが読み取ることができるものである。

逆に、「できている」「だいたいできている」の合計が80%以下のものは

- ⑩生徒の努力や達成度について評価し、個別の包括支援プランの作成や指導法の改良に活かしている（71%）
 - ⑯生徒が好ましい食生活を送れるよう指導している（79%）
- の2項目、
- 81～85%のものは
- ③生徒が満足感や達成感を持ち、地域コミュニケーションの学習に取り組めるよう指導している（84%）
 - ⑨教員は個別の包括支援プランに基づいて計画的な指導や支援を行っている（84%）

⑬生徒のことを理解できている（84％）

⑭生徒に家庭内で決まった役割を担うよう促している（84％）

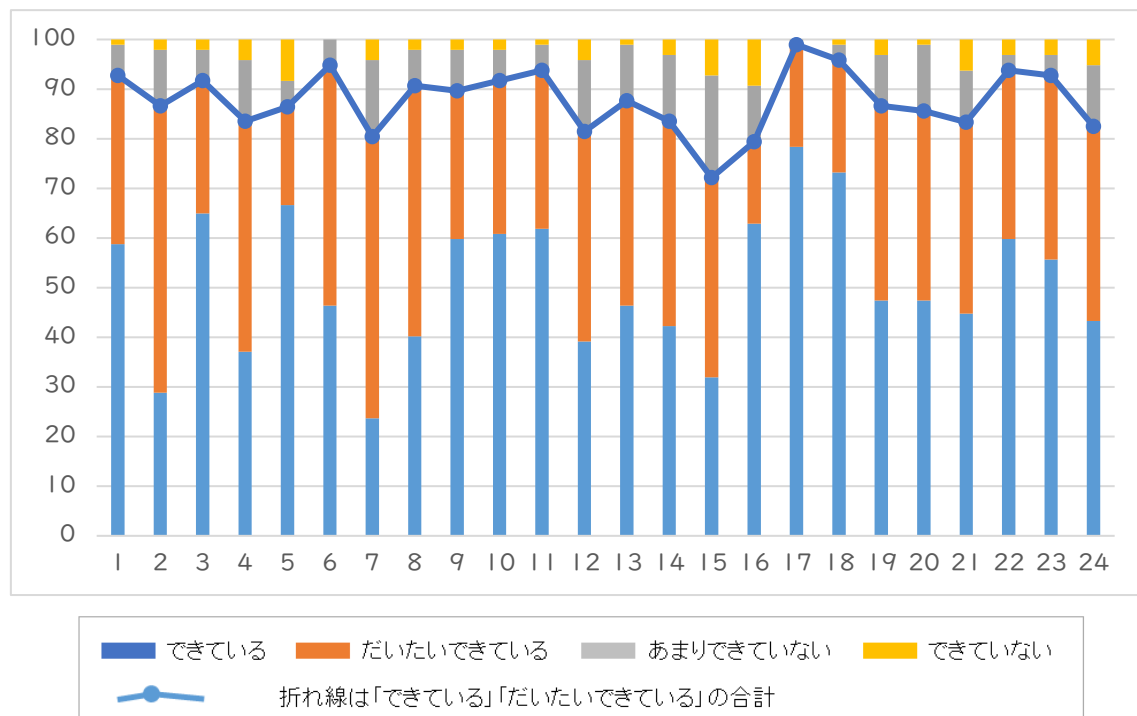
の4項目であった。

⑨、⑩については、個々に応じて対応や支援をしているが、それが個別の包括支援プランに反映できていない結果となっている。その原因がどこにあるのか今後より保護者に伝わりやすく、反映しやすい内容や式に変えていくことも検討していく必要がある。

⑯については一日の規則正しいリズムを作り活動していくためには朝食の必要性を伝えていく必要があり、食育の充実を図ると共に評価の高かった⑤や⑳同様、日々の指導で折に触れて話していく必要があると考える。

生徒

アンケート集計（24項目）（97/109名）



（1年生:33名/35名 2年生:29/34名 3年生:35/37名）

生徒アンケート24項目における「できている」「だいたいできている」を合計したものの平均は87.7％であった。

そのうち、「できている」「だいたいできている」の合計が95％を超えるものについては、

⑥一生懸命に学習に取り組んでいる（95％）

⑰清潔にしている(例.入浴・着替え・歯磨きなど) (99%)

⑱(学校や家庭、社会での)きまりや約束を守ることは大切である (96%)

の3項目であった。

この3項目に次いで高い数値を示した項目は以下の2項目である(数値はすべて94%)

⑪友だちや仲間を大切にし、互いに協力している

⑫企業の協力や理解があり、職場実習などができていることに感謝している

⑬について、生徒自身が日々の学習、実習に真摯に取り組もうとしていることがうかがえる。

⑰については99%と24項目の中で一番高く、身だしなみが友人や実習先に与える影響を授業だけでなく普段から教職員が伝えており、生徒自身もそのことについて自覚し行動していることがうかがえる。

⑱についても、普段から担任だけでなく、専門教科の教員、就労担当教員などが大切さについて伝えており、それが実習期間だけでなく、就労した後も大切であることを日ごろから意識していることがうかがえる。

逆に、「できている」「だいたいできている」の合計が80%以下のものは

⑦自分のよさがよくわかっている (80%)

⑮規則正しい生活を送るよう心がけている (72%)

⑯朝ごはんをきちんと食べている (79%)

の3項目、

81~85%のものは

④共通教科の授業で「できた」「うれしかった」ことがある (84%)

⑫自分は誰かの役に立っていると思う(ありがたうと言われた・手伝って感謝されたなど) (81%)

⑭自分からすすんで挨拶をしている (84%)

⑮家庭で決まった役割(例.お手伝い)があり、実行している (83%)

⑭困ったときに家庭や学校において相談ができる人がいる(82%)

の4項目であった。

⑦、④、⑫については、自己有用感、達成感が得られにくい、また、感じる場面が少ないと考えられる。授業の中だけでなく、普段の学校生活の中でも、スモールステップで達成感を得ることができるような支援をする必要があると考える。

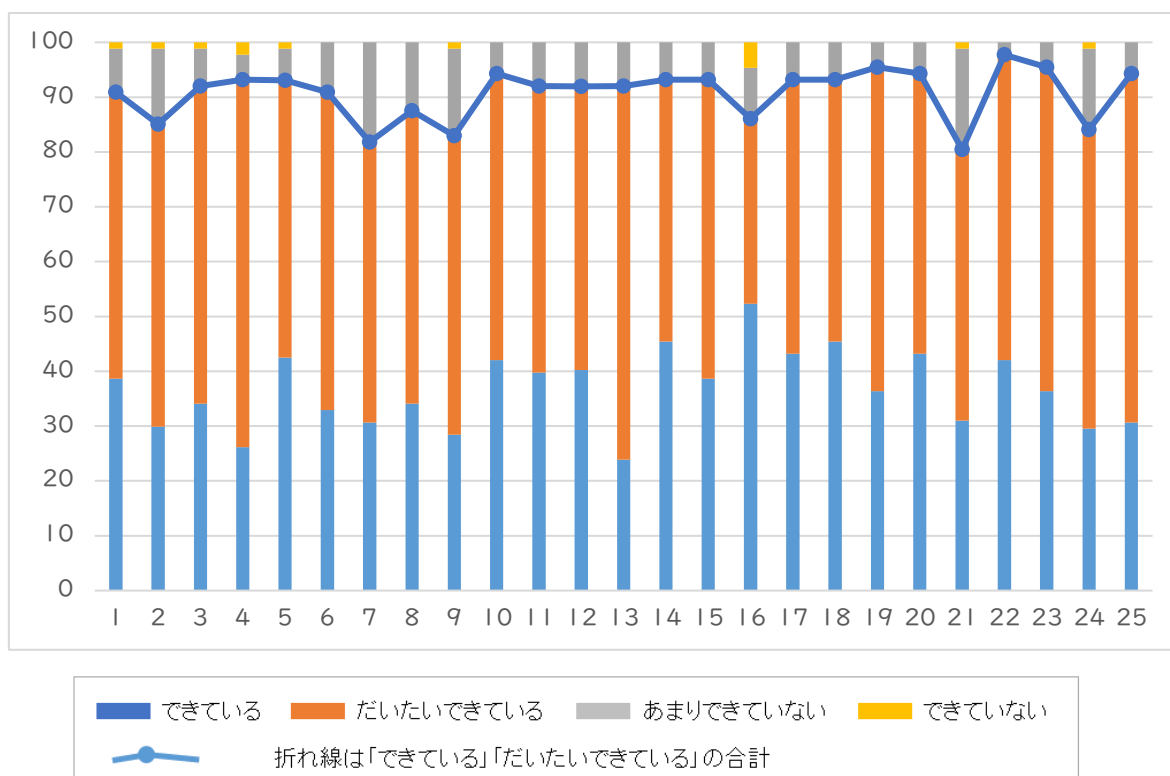
⑮、⑯については、学校生活だけでなく、卒業後就労してからも大切なことであるため、折に触れて規則正しい生活の大切さを促していきたい。

⑭、⑮については、待っているだけでなく自ら行動することの大切さ、そのことで先ほどの自己有用感や達成感が感じられることなどを伝えていきたい。

総じていえば生徒は一生懸命に学習に取り組む意欲もあり、職場実習などの学習の機会があることを理解しているが、自己肯定感や自己有用感の向上につながっていないものが一定数いる傾向にある。できたことやがんばれたことはあるはずであるが、それが生徒の中で確かな

手ごたえと実感にともなっていない可能性がある。これを踏まえた指導の工夫、例えば評価やフィードバックについて検討することなどが必要である。

保護者 アンケート集計(25項目)(88名/109名)



保護者アンケート24項目における「できている」「だいたいできている」を合計したものの平均は90.7%であった。

そのうち、「できている」「だいたいできている」の合計が95%を超えるものについては、

- ⑭子どもに学校や家庭、社会のきまりや約束を守るように働きかけている(95%)
- ⑳企業との連携・協働による職場実習等で最後まで取り組めるように励ましている(98%)
- ㉓地域との連携・協働による地域コミュニケーションや地域行事などで最後まで取り組めるように励ましている(95%)

の3項目であった。

この3項目に次いで高い数値を示した項目は以下の3項目である(数値はすべて94%)

- ⑩子どもが頑張っている姿をほめている
- ㉑子どもには時間を守る大切さを伝えている
- ㉔保護者として学校の教育の趣旨や目的を理解している

⑱、㉔について、家庭においても学校生活だけでなく、卒業後就労してからも大切なことについて伝えていただいていることがうかがえる。

㉒、㉓、㉕について、本校が大切にしている『地域との協働学習』『職場実習』について理解いただき、子どもにも その大切さを伝え、励ましていただいていることがわかった。保護者に理解いただけていることは大変ありがたく、本校の取組を進めていく上で支えとなっている。

逆に、「できている」「だいたいできている」の合計が 80%以下のものは

㉑家庭での役割を決め、子どもが責任を持って果たせるようにしている（80%）

の1項目、

81～85%のものは

㉒子どもは目標に向かって学習に取り組んでいる（85%）

㉗子ども本人に自身のよさを伝えている（82%）

㉙子どもの目標や学習計画に基づく計画的な指導や支援を把握している（83%）

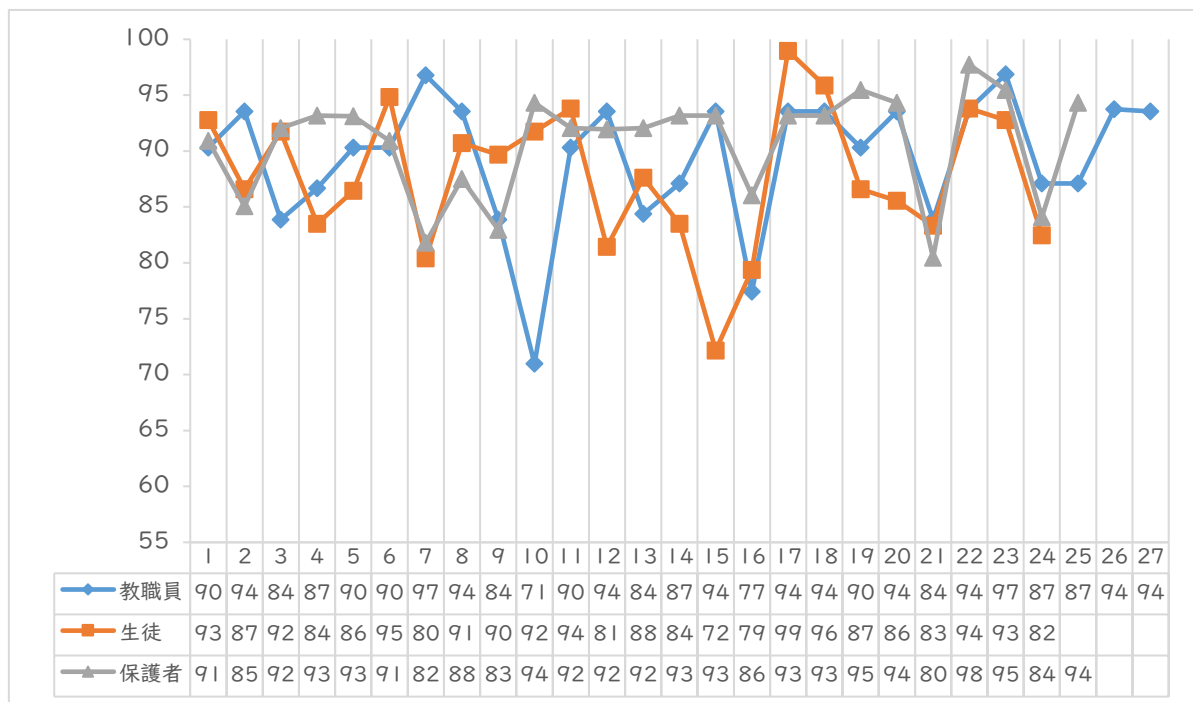
㉔個別相談など学校に気軽に相談できる（84%）

の4項目であった。

㉑については、家庭において、役割を決めそれを責任を持って果たせるようにすることは、今後の人生活を送る上でも役立つことであると考ええる。生活に関わる学習を軸として家事技能を身に着けられるようにするとともに、家庭においても役割を与えてもらうように促しを行っていききたい。

㉒、㉗について、包括支援プランをはじめとして、保護者へ目標の提示やその評価、がんばったことや達成したことなどを伝える機会を設けているところではあるが、伝わり切っていないことがうかがえる。生徒たちが目標に向かって取り組むためにどのような授業や支援をしていくのか、個別の包括支援プランを使用活用しながら保護者により分かりやすく伝えていかなければならないと考える。

教職員・生徒・保護者 間の比較



【教職員】【生徒】【保護者】の「できている」「だいたいできている」を合計したものを折れ線グラフにし、比較した。ここでは三者とも評価が高いもの（パーセンテージの合計が 285 ポイント以上のもの）、三者とも評価が低いもの（合計が 250 ポイント未満のもの）、三者のパーセンテージに有意差が見られるもの（ポイント差が 15 ポイント以上あるもの）について取り上げる。

(1) 三者とも評価が高いもの（パーセンテージの合計が 285 ポイント以上）

⑰(教) 生徒に衛生に関する指導や支援を行っている (94%)

(生) 清潔にしている(例.入浴・着替え・歯磨きなど) (99%)

(保) 子どもには日常的に清潔にするように促している (93%)

⑳(教) 企業との連携・協働による学習環境が設定できている(職場実習など) (94%)

(生) 企業の協力や理解があり、職場実習などができていることに感謝している (94%)

(保) 企業との連携・協働による職場実習等で最後まで取り組めるように励ましている (98%)

㉑(教) 地域との連携・協働による学習環境が設定できている (97%)

(生) 地域の協力や理解があり、地域との活動ができていることに感謝している (93%)

(保) 地域との連携・協働による地域コミュニケーションや地域行事などで最後まで取り組めるように励ましている (95%)

⑰に関しては、社会生活を行う上で清潔であることの重要性が浸透しており、教職員、保護者

からの働きかけが適切に為されていることはもとより生徒の自覚もしっかり育っていることがわかる。

②③に関しては、本校が開校以来、大切にしてきた企業、地域との連携・協働による学習が着実に行われ、生徒自身も学びの場のあることの実感と感謝の念を持てていることがわかる。また保護者においても本校の取組に対して積極的に協力いただいている

以上、3点については、現状、成果を上げていると言えるのでこのままより一層の充実を図っていく。

(2) 三者とも評価が低いもの(パーセンテージの合計が 250 ポイント未満のもの)

⑩(教) 生徒が好ましい食生活を送れるよう指導している(77%)

(生) 朝ごはんをきちんと食べている(79%)

(保) 子どもには規則正しい生活を送るように話している(86%)

⑪(教) 生徒に家庭内で決まった役割を担うよう促している(84%)

(生) 家庭で決まった役割(例.お手伝い)があり、実行している(83%)

(保) 家庭での役割を決め、子どもが責任を持って果たせるようにしている(80%)

⑫(教) 生徒や保護者からの個別相談に対応している(87%)

(生) 困ったときに家庭や学校において相談ができる人がいる(82%)

(保) 個別相談など学校に気軽に相談できる(80%)

⑩⑪に関しては、今回のアンケートでそれぞれ取組を充実させる必要があることがわかった。個別の包括支援プランの目標を見直し、今後の学習計画に組み込んでいく。

⑫に関しては、個別の相談がしやすい環境をより充実させていく。そのためには相談が寄せられるのを待つだけではなく教職員から働きかけていくことが効果的である。生徒の日々の様子に注意を払い、細かな変化に気づき、悩みや不安を抱えていないか察せられるようにする。またスクールカウンセラーなどとの連携もより密に取るようにする。

以上、3点については課題が明確となったので、今後、具体的に対策を立てて充実を図る。

(3) 三者のパーセンテージに有意差が見られるもの(ポイント差が 15ポイント以上あるもの)

⑬(教) 生徒のよさを積極的に見つけ、認め、伝えている(97%)

(生) 自分のよさがよくわかっている(80%)

(保) 子ども本人に自身のよさを伝えている(82%)

⑭(教) 生徒の努力や達成度について評価し、個別の包括支援プランの作成や指導法の改良に活かしている(71%)

(生) 先生は学習の成果について伝えてくれる(92%)

(保) 子どもが頑張っている姿をほめている(94%)

⑮(教) 生徒が誰かの役に立ちたいという思いを促す学習を用意している(94%)

(生) 自分は誰かの役に立っていると思う(ありがとうと言われた・手伝って感謝されたなど)(81%)

(保) 家での役割に対して、子どもにありがとうと伝えている (92%)

⑮(教) 生徒には規則正しい生活を送るよう指導している (94%)

(生) 規則正しい生活を送るよう心がけている (72%)

(保) 子どもには規則正しい生活を送るように話している (93%)

⑦⑫に関しては、教職員は生徒を「できる存在」として捉え、よさを伝えることを積極的に行うと共にそのよさを発揮でき、誰かの役に立てるような取組を行っているが、生徒本人にとってはそれが実感に至っていない、伝わり切っていないことがわかる。そのために自己有用感が高まりにくい傾向が一部あることが表れている。よさを発揮できる学習を充実させることを前提としつつ、その評価やフィードバックの方法にさらに工夫をし「できた」という実感をどの生徒もが感じられるようにしていきたい。

⑩に関しては、生徒の多くが学習の成果を伝えてもらっていると回答しているにも関わらず、教職員のパーセンテージが低い項目になる。生徒が評価されていると回答していることから鑑みるに教職員は評価自体は行っているが個別の包括支援プランとの関連付けがやや弱いのではないかと考えられる。

⑮に関しては、教職員、保護者とも働きかけはしているものの、応えきれていない生徒が一定数いることがわかる。全員ができていないという訳ではないことにも留意し、生活に関する授業での取組はしつつも、家庭での時間であることから、個別に丁寧な対応をすることも必要である。アンケート結果に有意差の見られた4点に関しては、項目⑩を除いては学習としての取組はしているものの生徒の実感や成果には至っていないという傾向が見られた。これを念頭に置いた工夫、とりわけ生徒へのフィードバックの工夫が必要である。今後の課題として取り組んでいく。